

太平洋共同体ヴィジョンの同志

マーコム・フレーザー

大平正芳総理大臣は、先見性と進取の精神を持つ政治家（ステーツマン）であった。私がオーストラリア首相在任中に会った各国の政治指導者の中でも、ひととき優れた指導性を持つ政治家の一人であった。大平総理は、全世界を包含したヴィジョンを持たれていた。とくに太平洋共同体については、関係各国が相互に協調し合いその構築を目指すことで、より一層の繁栄が得られるというヴィジョンを提唱された。

また大平総理は、現実直視型の政治家でもあった。われわれが住むこの世界では、限られた時間の中で社会構造や意識を革命的に変えてしまう大改革などというものは、そつたやすくできるものではない。このことを大平総理はよくご存じだった。その一方では、そのような大改革を可能にするのは、ほかでもない大事の前の小事を多く積み上げることだということを誰よりもよく知っておられた。

私は光栄にも、大平総理がわが国を公式訪問されたときのオーストラリア首相であった。そのとき初めて大平総理の人柄・思想に親しく接することができ、日・豪間に横たわる文化的隔たりと歴史的相違にもかかわらず、太平洋共同体の発展の目的・利害に関し、二人が同じ考えを持っていることを知ることができた。われわれ二人は、その発展構想において、日・豪が中心的役割を果たし得ることを認識し合ったのである。大平総理のイニシアチヴに因って、私は早速、民間レベルでの各種セミナーの組織化を進めた。これにより、学界・経済界・官界の人材が盛んに交流して、太平洋共同体構想の議論が進み、その肉付け

ができることを期待してのことである。

これらの活動が、その後のAPECの結成につながる重要な第一ステップとなったのだ。ちなみに、APECそのものについて言えば、その現状は、さらに在るべき太平洋共同体へのまだ第一段階でしかないとは考えている。貿易と経済のさらなる連合と政治上の争点を越えての協力で、より一層緊密化しなければ、まだまだ本物ではないと思っている。

時代を先取りした太平洋共同体構想

大平総理と私がオーストラリアで会見したときには、まだその構想の実現に向かって巨歩を進める段階ではないことを、お互いによく承知していた。これには二つの理由があった。まず、アジア太平洋地域の諸国の多くが、その当時、他にやらねばならないことで手一杯だったということである。ASEAN諸国は、現在でもその点ではいまだにそうだと言えるが、各国ともまさに発展の途上にあっただ。そのとき二人の見解が一致したのは、ASEAN諸国が各国の自立と彼ら自身の共同体の成果にもっともって自信が持てるまでは、それ以上の広汎な共同体構想は見合わせるべきだ、ということであつた。ちなみに、その後、彼らの自信は逐次深まり、今日ではASEANが、APECの中で建設的な役割を果たすまでになつてきている。

今一つ、当時この大構想が時期尚早であつた理由は、アジア太平洋地域諸国の規模、歴史、文化、経済発展が、いずれも多様であつたということである。もちろん、中国・台湾問題の処理の必要性が重くのしかかつていたことは言うに及ばずであつたが……。これらの問題を解決するために、外交手腕、時間、そして相互理解が何としても必要な時代だつただ。

われわれ二人のイニシアチヴにより、両国間は従来にもまして緊密になつたが、それは政府間だけのこ

とではなかった。学界、経済界でもその努力は倍加され、その協力態勢が広がり、アジア太平洋諸国を通じての交流も活発化した。とくに大平総理は、両国の将来が、いずれ成長してそれぞれの国を担っていく青少年の行動と経験により左右されることをよく知っておられた。とくに、日豪の若者が、お互いの国について、より良い知識と理解を持つ必要があるとのご意見だった。その結果、大平総理の提案のひとつとして、両国間の青少年の交換・交流が進められることになった。これもまた、今は小さくささやかでも、後年になって成果が大きく実るといふ大平流施策のひとつだった。

戦後日本の制約を取り除いた初の総理

内政の面では、国の指導者たるもの誰もが経験することなのだが、大平総理は、いく度か辛く困難な時に遭遇された。だが国際外交の面では、その建設的で先見性のある読みと行動において、歴史に残る政治家のひとりであると申し上げて決して過言ではない。大平総理は、協調的で平和な世界を維持するために何がよいかについて、よくご存じだった。日本がこの面での役割を果たすために、しかもそれを極力でしやばらない方法で果たすために、全身全霊を捧げられた政治家だった。大平総理は、多分、日本の総理大臣の中で、ある種の戦後日本の制約を取り除いた初めての総理大臣だったと言える。

大平総理の時代認識によれば、日本は、世界で最もめざましい経済大国のひとつとして、目立たないようにはあるが、より良い世界のためにそのままにも影響力を行使しなければならぬ時にきている。日本は、もはや、いたずらに手をこまぬいて事態の後追いに終始するのみというわけにはいかない。世界の最も際立った役割の担い手の一人として、日本は指導的役割を果たさなければならぬところに来ている。大平総理は、日本の立場をすでにこのように認識されていたのだ。その外交手法が控えめを旨としていたため、日本が国際外交の場で、その時点で受け身の役割から積極的役割に変わり始めていた事実を世

界が気づくのはいろいろな形で遅くなったが、実際には、すでにその当時、この役割を大平総理は外交面で立派に果たされていたのだ。

このたび、寄稿の依頼を受け、おかげさまで、今回の『大平正芳 政治的遺産』の出版計画にいささかの貢献をすることができ、あわせて大平総理の追慕にも資することができることは、私にとりこのうえもなく光栄なことである。政治活動から引退して以来、長年にわたり日本を定期的に訪問させていただいているが、そのたびに私自身、日本への親しみと結び付きが一層強まってくるのを痛感する。年ごとに太平洋諸国の平和的協力関係への相互依存度は深まり強くなってきており、それはとりもなおさず多角的相互協力関係の進展を意味するとともに、われわれ日・豪間の相互協力関係の深まりと強化の進展でもある。

大平正芳記念財団が企画されている『大平正芳 政治的遺産』は、大平総理の思い出を不朽のものにするためだけでなく、大平総理がその生涯をかけて戦い追い求めてこられた理想と大義を称えるために捧げられる作品でもあることを、私はよく知っている。したがって、このように寄稿の機会を与えられたことは、私にとって二重の喜びであり、心から感謝申し上げる次第である。

(一九九四・一・三一記)

(元オーストラリア首相)